蔓

加賀文庫

花宴

巻名以詞名之詞ニ南殿の桜
てのえんとありて花のえんとおこしもて
南殿櫻宴則花宴也
中ニ奥の二条わたりの藤の
宴の夜ニ藤の花乃宴もありけり
とあれハことはにつきて巻名ならは
花宴といへるやと見えて候へと
古来花宴とハ桜を翫事をいひ
ならし給ふへこれを抄中書之

加是は私家の宮あされは粧ある殿の
さくらはえんとまて称間とせりと
ゆかへきこと
大唐には牡丹を花と称し日本には
桜を称す
此花は紀家都督への花丸次の年の
春也　源和十九才也

きたしきのまつあかり
南殿　紫宸殿也　櫻
此木殿の巽角にあり是大君
草創よりの樹也貞観に枯
とふても根より継まて崩けるを
坂上瀧守勅を奉てこれをやる
枝葉再盛すと
延喜御記にも群列桜樹東西
たとありて天徳に焼うけるを
康保元年十一月に植る則

枝を同二年正月にえらてまゐる
三月に花宴あり南殿の前に
一ハ重明親王家樹ニ八ハ西京より
移し植らる其後所々に植え
毎家うゑてこともなし

二月花宴例

弘仁三年二月辛未神泉苑覧
花樹命文人賦詩賜綿有
差〻花宴之所啓ハ此於
雖有之宴席の開事多ハ
清涼殿に還御有テ被行之
延長四年二月十七日御記云
此日殿前櫻花盛開仰召
文人聊開花宴昨暮臨合
召可候文人（ミミ）今日遣使召常
陸太守貞真親王右大臣（定方）有
所煩不參申剋常陸太守
親王参入同剋御前公卿参
東之庇自北第二間數并四座
西三枚お小階前置子數為親王

納言座、桜樹下鋪座、西面為
文人座、面剋大臣着、藤原朝臣
参即着倚子、令召、頃之藤原朝臣
式部参来侍座、仰令召文人、即
文章博士三統朝臣、式部大輔博文
朝臣、右中弁大江、式部少輔諸
蔭、侍従内御書所、大内記橘實長
以下文章生已上七人参入、従華
門、着樹下座、侍臣給筆墨、仰
令献題、菅原三統朝臣昇殿進
藤原朝臣座前給之、令書題目
奏、花房紅蠟珠、作文令上文書
奏、書之、櫻繁春日斜、作以
後所上為題、又作令探韻字
右近權中将實頼探韻奉上
次親王以下就文臺探韻、作
清平朝臣、元方、在衡、維時、君甫
等探韻、令就庭中座、于時内藏
寮給酒肴、中納言藤原朝臣参入
仰令探題（韻字）了後、仰召樂所管

絃者四人時々奏音声以助
誦吟及子剋終題取文臺以
公統朝臣爲講師讀詩作文人
未近侍砌下令講其後管絃
頻奏吟詠不止仰常陸太守
親王彈箏中納言在原朝臣彈
琴及丑剋給親王納言御衣
文人給綿侍臣及樂所人等
給疋絹寅二剋入内侍臣退出
度々花宴了申定長四年例

探韻以下如例なり
此巻花宴の事に紀家記の
巻を行ひぬる人の心ちかう
なるよしあるは脱屣殿ある
まし此達は延喜の先例とその
宴を開かれんと定長四年の例
をも引用るも醍醐御代の
年号なるによりて其面影あり
后春宮のゐつらを左右（オウ）とされ
東宮ハ左ノ方東也后ハ右ノ方

西の方殿の東面通
所ハ中宮藤壺也東宮ハ梨壺也
梅ゝのかたハ
皇居也宴遊なともあまり
弘徽殿女御中宮の
藤壺ニ立后を越されてとやを
かゝる弘徽殿ハ桜花も閑居
もろき心地といても今ハ念
其をとえすしれ皇り絶
月いとよくされて

二月末の時節ハ桜花宮中
のあさき殿上人の袖をかひ
やかれみつゝし宮の内まき
都の名所にも後世みそ花
風俗ありてし末代の眼まそ
みえつれ
うれしきのく　文字にくつさる
へくし
先東儒者面奉御献題二ッ献之
随勤察
定之次書翰字盛中境置

庭中之文臺上近衛次將先
探御料韻字二字置管蓋
自御前諸献之次王卿堪屬文
者文人等各進文臺頭探
一字見之書官姓名及所探
韻字也

或
其作法いはく題を儒者のえらびて
以古詩を一字つゝにしてさくる也
詩の名句或いは時々にあひたる句を
用る也庭上にして儒者文臺

乃ち文臺を置て中少將たちを
主上の御前に韻をとらしめ給ひて
なる嚴こゑにてよみあげて一字開
あらそひれあまたに二あつまりとめ
こおもひて詩を案し作る也
諸臣は各一字を探用し作者
十人あれは文言詩二句を一字
つ韻とさためし壱人の詩は七言
の二句を用し若書くらし

或
韻字をわかちとるを各分一字と云

きんかん　揮翰也

宰相中将　源氏也

春といふ文字　源氏の揮給ふ

翰ノ字也

翰字を揮ふてハ名其字を

中もて宸如名何の字を給ふ

とあるところに

頭中将人のめくらし

源氏の卿を向うつもたてゝの

半きかんくてしるつくと然

頭中将ハきみにたとへて　木　ほたるし

こゝろつらいたと

こゝろい返事と筆のあれ

かつらいすへきすとみさら

さての人こい　そゐの人かた

地つからて　臆しる也

大かうの人ハ赤面すると　いうり

て臆する人ハ鼻の色こそ見え也　抑也

地下の人ハ　地下の文人也

殿上の人の相みられつまする

ちくさはよろしく見て此方の心
ましてと也
又とう宮　桐壺門　東宮に
世尊寺流也　いつれも此方学すれ
ども
かゝるつたへ　ことに文字をひぬ
倭のゆへほかにも古しへの人
ゑみきつとく
やすくしはあれと　言いて詞を
ちくる極の道にやすまる事
なれとも也
あれなる方に出来のわすらぬと
さまさき物なるへきと知へし
つけよと也
さしはかるもの也　物なれる
おしは何とも見えぬ　能への
つゐることし也
まいらする　（手）筆花ならは
和の事にはあらつける道
かくとも　兼良筆花記宮御例まて

されはこそ殿の舞楽にも
天暦三年三月十一日二条院花
宴（陽明院本に）同月十二日仁寿殿
花宴の南殿有舞楽別
春鶯囀を奏す但地下の
伶人のみまゐりて殿上の舞人ら
なし皆是有例也猶可考し
春のうくひすさくはると
春鶯囀（壹越調大曲新楽 一名天長宝寿楽）
南宮横笛譜云昔日善儀此
曲者右大臣源信朝臣及臣將
武人亦仍承和御時勅信朝臣
以此曲令傳習于成康親王令
于御笛條於清涼殿前視之
者無不感涙
源氏の御紅葉の賀
花宴の巻なとにみえたり
春宮といふ和名にて
（鶯）春宮は朱雀院也源氏の
花宴と紅葉の賀とを常寧殿にあるし

此舞は春鶯囀の末なり
渭州ならびに女舞もこれ
袖のかへるところ　静舞袖之
二種也　二折也
東寺御所望なれは舞侍
にあらぬもありて　又寺は
青海波舞なるも同様なれとも
いにしへは見りけれとやみぬ
面白し古来の舞のたへにし
あるやきこえし

右乃外にも　渭州の舞女舞も同
兄弟なれ共後渭舞とうたく
兄の女なれとも父のかはれ之
殊手妙にて　紅葉賀の時
渭州の舞女舞なれはこの服
何とても舞まひけれと作る也
柳花苑よりのまひ
舞曲ニ云　女形也云々（胡旋女如吉祥天女云々）
上古有舞　今斷絶
今にたえしまして

源氏よりハ久しく藤之
源家の長きすり藤之氏長る
（て）に於中将又然し権する罷
なるへし是ハ久しく出い
くるも又よ卯也万の事
又ひくちあるへきまし
かゝる事もやと　う袖の紫を
おもやとおもひて周忌の者侍らん
とそ
（キ）人の袖ともすけるん下賜

衣をたまハりて　勅禄と謂之
給御衣例
（テ）延喜十七年菊宴の保忠朝臣
賜御衣侍従給酒肴数
人女装束絹お給へし
延長四年菊宴親王納言賜
御衣文人綿楽所定絹に
（キ）中殿宴の日殿上の輩又勅禄
をかつく事ありとみえしき
例也とあり

こまらめ　揚目也

婦ことを稱するにも

手
ふことは詩の事をいへり

こ
詩を作文なともいふ

申
詩をと校稱する時は庭中にて

しる文字をかきたるは藻にて

文人とも階下にすみて稱

頌へするなり

源氏の心とも　此文字は御詩

をとことをいふ略していへり

手
たやすく　いふらくは書する事也

かくしもえやらて　え稱せさる也

講せさる事をえてやめたるなり

秀逸を感してえ稱しやめぬ也

秘言意味深長なる也

句ことに　毎句殊勝なる也

かやうにて　いふ事也

桐壺御門は何事にても源氏の

ゐとをまうしぬる也

中宮　后の宮の御事也

書写上人　是より霊臺の色
うらにくひろさ人へと結縁
御事ハ往としてあるからくゝ
結えとも
やつかくれのやみも　霊臺の心の
ひくもしやまのしきまと雲居の
山中を見えひくく行て
霊鷲やかく見えもとい中古の
私そ松原を入を見つて後て
見るさきを[illegible]まゝて見えよと

松の色も色こく
ありけり　鐘楼中堂の辺
霊鷲の山とも言つへき神
仏閣より地を流く
げにも霊地もさらに霊地なれ
これそまことに霊国の人を
春のとく霊地をきらめく風
吹くとも地見えとも
東洞の霊地も霊地をみかと
人も菩提ハあるまじき事なり

人と頼みまいらせたまふよりの
物思ひこと大かたならぬ人々
つゝしむとし
か
貳
○弘徽殿の女御とも御仲よ
からぬをうしろめたきを弘徽殿まつりことゝ
おもひつゝ人々いたはしと
御人のうらやみなんと存候
千載
○世のかゝらぬあはれなるを批判
して御ひき
あはれ
一段散也

かくしなさるへき事
壹
王命婦の房なるへし
貳
○中宮の御かたみにさへあるへき拙よ
事なれとしき始をもとむる事の
弘徽殿の事に付て見侍へし
○こゝ細あらしに　悪殊不有（十ヲ　アラシ　百七）
心細あらしとあるのあさましはかは
関之所とくすくる物なり
○あるのあるさまにとのわくさまに
さりとあらんやうらし

弘徽殿　桐壺のすちなるへし
わりとの　細殿也
廊を細殿と云也
三乃くち（すミ）　廊の三ノ口也
弘徽殿ニ南北へ細り通され
廊ありそれか第三ニある所也
そのみちを　上局也
やれ　御遊よりみ中の程隣之
おくのくまとも
口くもゐにてくまなしのてめ　百案
長亭

くるゝ所載てきこ所とも是する之
（宗）くるま所と云所をみるとくるてども
とみちとも　共とも云用之
三ノ口とは別ノ所也
世中のあやうち　世間の人の
わやまちぬけ出ぬとゝ
（家）口此句面白し　衆人のことへ
のみかるはかの人とあやまち
なまかれて用へもくへし　をく
（手）口源氏の今比のあやまちもさねて

思ひつゝあかしまし

いとほしく　右大臣六君也

後朧月夜尚侍と云

おほろ月夜に　是より名とせ

照もせすくもりもはてぬ春の

夜のおほろ月よにしく物そなき

哥　ては似る物そなきをしくとかへたる

あるへきにもくるしからぬか

源氏の方へ来るとて来る

かくれてあると也つゝみ字疑ノ

字ニ非ス

目

一 楊弓也ひと一列あるは大饗哉

あさむくつわ　朧月夜の細殿

むくつけは　おそろしき

何のうちよりしき　源氏の細殿

姉なき　藤のあそひねを

須松　う抄見之　みけさいは　おほろけなれ

思ひまてはなきとて　あそれを

三月とは　おほろ月夜にしる　細て

なゐとは　いふとはかくありとあり

おほろけには　少縁ともちり

待出つるかなハ半ハ縁なる詞也
（系）まことの心ハ夜もひとりまちし源氏も
待出る月とこそあかれと見えし也
見つけぬ契りの待出つるかな ちとり
ちよう入月ハ長き月也
（定家）今の待出る月より及ふかさなと
吟せらる月の気色を見て 上句ハ
甚心されもわれより我身か
源氏も月を気色と見るゝ人の
のもひとる 待出つるかなの哉

さよ明つの月を見て あかつき
けきぬ契りといひて あくる
あさましきに 長月也
あらん人と 長月の頃也
まつ程に 長月の頃
（錦）晴の計器也とて
（私）女ろゝゆるされぬらん
なんそ夜すの 何ぞ事の
我身の下もあらまし きと
比見えて有りと

須磨と云ひしら処
まゐりしと　ものさびし
つれなきさ海まとみしとも
見ぬるし
恋ひんちや　須磨のくさ
はらからも　○手姉のやくしそ
見るまうき松ほし　○手夢はたちん
雅すく明日ゆけし　○弐ある風るし
に也あはけなぬへてあらて
はまみすん

お伊勢のとしぬく　須磨の浦
いそのきみゆき
向後行しれ中かりのさきえとと
かくそやきすんとい
ほまりにそやまんとかゝるまも
松ならしとと
う羽男世とやうて　○弐須磨の浦し　あひりて
かゝちゃる見ちりめ
○手弐あまのりしれくいそのきゝゆき
とあらばなのうをとゑやれふ

ましきにてそりおしれ字の字をと
こそしとやとあり
すけまゝにてハよく如くては
字の字まれも物ちゆきす
ゆるれなるのちをそ字の字をと
見へしと見へしめす字の字の京
陳へ為御よとふれてことと（こんて）
あとえりやきこしてくれ
陳めの細と御細をすれ候
錦部もよミこと申ハ損へしる

やうなれとも御委細ありとも
其ん所いられ候と御のやうをと
とし
云ふ　両の字を言あり今
とのへて次の言へつけれ
りやうしとて申ちかへるも
これとそうありとも
うれしと御のやうをと
御のやうりとおめかうしうすき
いされと陳しかる言と物と

三物ハ発句の外の他も哉にも
あるによりて侍るべし又ハ人
のかくしいつゝはいつれ後あるき
袖を付ることを見る人に（雑哀）
（秋平）又源氏と平家と中よりのね
まきらかれけれとたゝるに
つけれ女中のかたくにいひきられ候
と源平のことあきの座より
物もそれかけよのうり
（恋）源氏も物もとにかくしく旅も

それも物あれはよきにいへり
廿つゝしう　源氏の詞と
女の為すつゝしう　松風
露頭して　ひとめくきこと
（平）世詞まつすまうにみるべくゆる
されれをあると申しなん
まさい物とも　この物して云ひ
つたへる哉源氏をたてうて
のかたこと花をもいはあ底
くのいつれは

弘徽（コキ）殿女御うちの上﨟に
さふらひし也
扇かりを　あまたかりのを
清原のむすめにて
まうされけれハ　清少納言その
書をえ
かゝみさしらるも　猶えしける
人もあるに　ものゝふめき
紀家見給の人々　おほくさふらひ
ふる　ちかくへし

かうばし　私人々のことゝひける
打かへしを　いふらん
はきしろひて　目突（ツキシロフ）
唾すゝめてはしつゝ人に
かねとそ　清少のゆかりを
云はあわれてつきと寝覚のる
さ梅をつゝむに
此程こと　母の兄弟をとし
中才とゝに
五六（ゴロリ）の兄さまへ

一 是ハ相模か月頼也

うらみわびのうた

此哥 後拾遺集恋下也

すさめね哥君 題者物の心也

をさめね 不愛也

山かつとハ人もすさめぬし

又あやしきものゝしをし

情不愛の人を

あやしく 実手 中くとは此哥の

世をすてぬをつらくいふる也

一 是ハ東宮ニ 此哥ハ 勝月相模

いふ君なり

いつ御くも 咲付るよし

まうそしく

相模ものそ或仙振もこゝろ

うしき也

され縁あんらハ 此君にそ

みえぬもみえぬものそれ

あやしとも

あらぬそれ 言かよへ

人のむすめなとの　宮仕
つかうまつるとて見えけれはせ
人のむすめなとのつとめ
まいりみえたり　斎宮女御達
斎宮母宮より給はく　梅壺へ
もちゐたるかくへ　斎宮又
おもしろくおかしうして六条の御法
所くまての女房まても　その
こゝろそおくりて斎宮
人の心へきやうはえし

弘徽殿は、又右大臣のむすめにて
はなやかに、いまめきすみのこ
給ひ、上の御しきのれいなとされ
ころとみえたり　弘徽殿女御
ときとしたる人なれは、女房
なとも　西のうちきまうれとも
こゝろよく人もちゐ　孫悪するかり
また言うにおくみつよはら
所なれは、女房なとも　あさみて
物のうへ見れとよりて　かける

あやまちもなかりき
〇うみなとゝあらば河海に葦
のあるなりとみゆ葦鴨に葦は
宮古のうちにもあれどいつくにも有之
葦垣中古の月をいつもやどに
鶏に河ノ紋ニ葦ノ葉ヲ附
知鶏ノ葉ヲ用也但井筒ニ
左右花のあまり葦の方みる葦
のたつまさしとアリ此後
西白鶏の立ちけりとあるを葦

あまりといふに葦鴨の事も
難波潟に井筒をいふるなく
左右花あまりとみて左右花
このころ川とも柳つねと
左右花そのく徒と柳く
柳ふつさと但らくへ流る
紙に葦上のあまりといふん よらね
左右花をみあまりといひて うたん
〇それ日ハ後宴（ゴエン）のこと
此右同男踏ニ御気服あるか

了簡の心遊也
見れと哀にはさりなれいりて
流しのあと　津の所作也
きみかかまトかりも
昨日ハ面白也今日ハ用の寄
稀有興也
若つねえ　上の句と寄りぬ之
晴んとハ遊興すれハ暁方
心寄香てさりぬさと
うみ有明ちやしめんと

臘月也之有金花の息女嫁
物見てまゐらしとゝうりを
うつゝも始て
心もちにて見いてね縁
物名寄と言翔有朔の月を
縁ある也
心まよひより　雪山遠の節
是人（相和とやし）之
心のちん　中ノ重ハ味陣ト
雲雀（ハの方之）雲雀ハ身

朔(サウ)平にあり　承明にサクト
読なり
此ゆゑくの　表書ありし紙の
名の方くより参りつかひ達
宰相中将　右中弁
臘月朔の見事之
此あげ道　令教也　内よりの
返事をとゝ之
返
御郷殿よりの返事なるへし
希しくあるぬ

返
あしく写さはとらも
なり
つゝまし
いましていられまゐらせん
まゐの見みさうれと知らせ之
ちて杉とく　左大臣也
おとしくもれまゐらせ候も
よくみまゐらせ　臘月朔の
さ候月とみしうかゐる道に
れ
いまちとも色く早業しれこ

ちるとて　はまくらも枕に傍ん
もやうくるしとも
姫君いつも　世に逃
（様）よの御しつくしとすらぬよと
あはれなり姫君のもとを出い
かしめつうるし
りけまなれ　姫君は張なれい
居しやとおりやうし縁
うちふくれをねいくし
なとしめとあり

かゐきうしのあつき
ことわりてのことをかさねる
橋扇の南方のこと致けを
うち払ひてつみをかくの添て
そらてもとむとあそひもとむて
読られてもろ　正言の扇も
同く致つはかし也
さらのうきや　打もて白くう
はるとなやまい　蘋苦とあり
あさのうい濃はなの雪かけさて

月ともしるすや
翁ハ桜かれの葉のことはに
のこし酒飯を引て月をと
しる如くて花ニ来とし　如しいふ
不審
目清少納言枕草子ニ芬筒のき
物ニ云ひきさすの扇あまた
ありぬれハあまりなりつくしてとあ
枕草門のしく
古翁もともゆへうつしかれて

ありしるさとへつらひゆへなる　もと
芭蕉の奥をとへ　翁の言ニ
朧月夜のさかひ
よにしれぬらうそれ
源氏の中の歌逸とい行　不審
疑然也　もし
世ニしれハ花鳥とも　其へ
さらんこ西ハ月をとこふんこ
下の人ハ朧月夜をいへれとも
しれ雅ともわつらかしとへ

有明の月は終夜在明なる是
明るゆへに有明の月は明日来
いつとも定めなき事にて
とは行末をしらぬ事也
中 素性法師事に有明の月の
紛ことをあはれそ野辺の露は
きくへりけるは事をとそうそ
よあり
詠 詠世をしめはなそらしも世の
字のへすそはあらましきみに

中 あれし よにあふ坂の関まて
ゆるさしのうたよみまそ
中 あれし 私 如何
かきつけて 扇をかさ附
相 わいなりも 葉室ミ
まろ君 清原也
あしく見とを しくおもはるゝ
いき給へもれ 私 清少のささ
あかぬ前なく 紫式部かちらく
秋ハ人のやうに

手

呂宋島にて住吉のまうと人の

伊らんと へだてられてこそや

とおわせとありけれどもるい

めづらしと

杉との御細へ [illegible]

男のをとこ [illegible] みちこえさ

関 勝れ ますやましくんとも

婦人のまゝにをこそは人 [illegible]

しらたりしもあんりとこそまつ

んずとらぎきとも

ゆころみ [illegible] てり給ふともど ちもく

えしくてよれを速のと

住吉のんさ [illegible] くは流よく

御むとし [illegible] し

う連くとよろ [illegible]

善吉の子連にも [illegible] しぬ [illegible]

いう連くといふり

清み [illegible] と満ちくわれて

日本和と打ちたいあまた和と

つらるみし [illegible] 離く ぞえし

やそうしにぬるよは
従属楽律ハ晋河也
ぬまさ河の世と此也波沼已多万久
良也波良加所奴留与波
奈久天称也太久留川来
そし此多称ハ浪称也浪あらそ
めるよろしとゑとは華上の
やりうの為めへさ須よよそれらい
始之
（七十二）白のもとし　苑宮集のおさし

（手）五十代の中ほさるし
あらのよそい　於ろのよそい
めいよろみハ世四代（シダイ）
陽成　光孝　宇多　醍醐也
貞信公元慶四年誕生延長（七二）
已ニ四代也于時右大臣也於唯拠ニ
足リ又延長八九廿二朱雀院
受禅シ日蒙関白詔ヲ計引入
（二三）濃漂巻ハ於ハ称及号每（之矣）
一統忠仁公ニ唯ス称ハ淳和

仁明文徳清和也

ぎやうざく

考課令曰凡定官人景迹功

過應附考者皆須實録

注景迹狀也稱言狀迹也

あしさかるべし

今の文に景迹ノ二字をば形迹

とかきて人の行迹の事なる

をいへり其例のきやうさくも

みともめてまれなる人をいへる也

又景迹は兄やるとき人にも用ゐ

推察といふ意に景迹とも書き

さまも人の行迹をみてぬるの

賢否をさするなれば心に通ずる

あるべしともいふ詞なるべしと

みゆべき也

日本紀天武紀下十年八月

宮来景迹行能

何れもひめたる事と私すれ

しる人といへるん又は作る也

みちくのしのぶも
源融君通くのミ子ゆよく
忍ひてめしむかへしと也
聊ぱ゜ぱ゜く　騒也　将ノ之
あしたてのく　源氏の物語之
別してのくたる事もありと之
扨ぱ゜しくむすまき　姧ノ字通
かくましきこと　陳署なるんとあり

云萬へ出つのくすしてかくれ
みさる君の中こと上ゑたちとあらぬ
めしむしるとと
（手）奉ゆそしうする物と繍の
とまさる物りて　松夕やけすし
のうらぬのもね物とかくこ之云
（手）姧死ニ　姧うぶしんぞうすミと
（道）文かたとするんやミと
（手）姧　字書ニ姦ト同字ナリ
柳苑蒐　（手）勅撰として

嵐雪とは東　御両目の
よし　称申し
何様く喜之　こそもの事に
右左しるしなくて東附の
面目なんとて
書
たゝるも　頼しく　書ひ置きき
思ちなん何　とあらはれより　て
此卿酒部の　ひらずて
今は親子智　男むとなかれ
挨拶は　あそなく古は人偏く

和しるとみえたり去来
之部
あはてきゐる　あかねて　興あり
感あるし　来てともよろしき
とあるし　西吟に興あるり
を郭中の柳苑にて時しりて
さゆくれにもなさもあつと　のみ
し　西吟は和しるよき　西鶴
当時の情をも見ひるは　まねしさ
まし　はましくの暮れてかみ　才
やるし

弁中将
○日 さへりけり　華宴只事也
かの有明の君　朧月夜也
東宮には卯月ころの
朧月夜東宮へまいるへきとなる
すてに来月とあり
おもひみたるゝと　朧月夜の心也
尋ねきこゆる（めしもと）　尋ねきこえんもなく
右大臣の息女のうちにいつれとも
あとはかなき　弘徽殿のこなれは

やよひの廿よ日（ハツカアマリ）
弓のけち　（良）是則ハ賭弓結也
弓結あり（宮まゐりしまへあれ）されハ藤やけ
とこしまての人ハ和弓のみ様
あり　其結ニ散方あとせさる
也　結ハあけの人躬る也
（中手）○おほやけとにはあらてまうし
弓場殿てあそはすてうちくれ
あそひふかあそひとこそ
かのみちかんたちや

みる人もなき山里のさくら花
ほかのちりなん後そさかまし
外のちりなん後そさかましと
よめるハ詞もをかしく[illegible]なれハ
其[illegible]えてによまれけれハ人を
よりてかくよみける也
定家の[illegible]よくつ[illegible]らんいとゝ山
[illegible]かくしそ[illegible]にふるとも
けふをとりて[illegible]
いつまで山いはむる事にてある[illegible]の

[illegible]さりのさかゆるけれは
ことよめるハ本二[illegible]なくして
[illegible]るハ[illegible]めてる人なれハ
やそれ[illegible]る[illegible]と人をとりて
よく[illegible]る[illegible]の[illegible]ある
やさしれ[illegible]りもつゐま[illegible]
筆のつゐてそか[illegible]中
二本をもりて 或ハ一本をもりと
のうまる面白しとあり
[illegible]段

宮にハ御もとさの日
源氏姉妹の寵きこ
紀（或）織部正殿のむすめの小まく
右大臣の家にてあそびし
物語ハ日記にてある言ゆへ深才
しるはつはまへと略してさる
まをと様之まぬつれにて事
あるしるなり多し交師
かくして優也
これして也

殿の子ハ右大臣の相弁之
おろ川きみくゝ人の同弁とて
やしき也
四位少将　藤大納言の事也
まろやとの君し
新当の郡の左ゆゑきたりよりて
善通はなくなりて集まる
源中納言も侍やうとし菅通
あはとひなりて源中納言と
かたしあつめへし

さりて扱をける程かまへて
表形つゆ書きてなをし　才
さてうちわれなりや
高門ゆくして飾やとの花をと
ほめらるとさてうちわれなりけ
つかせ給し
まことあめりし　御門の傳し
女みさうち　源家兄弟なみを達
兄弟の女官達もおもへるなれ
さうしくせられよと御教訓あるし

兄弟まして候　かの宮人給るし
まあわてうつるなれ　才
ほそのかしみえ乃
かのさ　絹衣の袴さへ汁紫紅
中地の衣の袴にも文ハ文くの墨　あり
一色にても織る錦の唐織物　わけい
二重折ものとも　唐紫練
其名ある生ありそうまて
本紙紫紅綾帯と唐繍を用るこ

はくみのきハ両まろくみさ
より藤芳の嘉をうけたる也

直衣（ナフシ）布袴（ホウコ）

常の袍に指貫をれ袍と
をは布袴といへり也

或紗綺とハかいきなとの類也

綺説文繒也師古曰今細綾

ゑひそめ　蒲萄染

両藤芳嘉ハ是也

よりいとをすく　下襲の尻也

袍也

西宮抄ニ云上﨟ハ直衣の下ニ
着下襲随便不常着之
今案袍よ下襲をかさぬるをハ
布袴といふ上下用之事也
直衣よ布袴ハ依時依人
事也帯ハ丸鞆也或革帯
ともいへり晴時ハ着蒔繪

野太刀

河海（衣ニハ不載之）直衣布袴ニ宿老之人

可有也然右大臣源氏雖
非宿老依為尊者着之
紐さし
みな人はうへのきぬ
うへのきぬ　縫腋也束帯如之
あざれたる　左礼る也
うちとけたる姿也
（衣）常の袍を指貫をも着して　裾
とけはよのつねのきぬ也　直衣　又
裾をかくるはうちとけたる姿

とものへし　大君は王の子也
大人のむすめとなんいふ
いつれ入綾つる
（衣）冊（イウツカン）　かしはさんて
中くおとさまし　帝子也
あらうやる　うち解之
女一宮女三宮　女一宮は若葉
一品のみやよりもうちと　女三宮は
若舞源氏也　芸弘徽殿腹之
若えたるさの一つ月

若ハ宿禰の方へちらくら也
若けよあれは桜もあるそれ
何うん
宿禰殿の東北つさにあちら
かなうし
袖くらべと
袖くらべ宿の
下より女房のまあ乃袖をひき
晴の付いてるままに東にも也
栄花物語ニ枇杷殿の大饗に
女房の袖くらべおとくうちされ

とは小野宮右大臣実資雅
せられしままあり今の物語は
弘徽殿の女御のとめいれる
御つゝきて袖くらべも同じ
いろいされらばさらつるを
見えかうしはきらくの月
それらばあさらおとくしき海
ゑこ
折ゑおれ庭ちろと
女の袖口知るもれハ白菊の
女踏ゑ見えおかかとなり

踏分の何乃也しまねなどのうく
ゐとさしめをさるとし
蔵童まとり　藤章の中将之
中将の姫御とは世に流なると
せんとおいそれ也
うやまりしきれ　津の國の細之
古地まうもしきれつよくしの
うきてらとし
かしこもれと　うつゐけなきこ
怨まりしさん也

うきまもかくさせ
御兄弟をとかくられし　姫君
うちの方すし
若き花はくらい　父御河
ろうられ也　直通入りて
よゐゐ人くらそ　清すふめ房
そもの細し
見手驗き人くらし紀親をとうう
物ろゐれとし
言まさなんそわていふつなりけれ

是も一乃をしへ也やしなめ
よろしき親類にうとまるゝは
みくるしき物也されとも身の
ためにて是非なく離縁する
可也又當世の人のならひ
親類をたのまさるはいよく
あしきこと也
うたかひ　うらみもあらは
もつてのほか人の悪言とけう
みとくしきをみせしいやしき

事也
いまめかしきを作當世様也
あの戸くちは　言ちらの物見
御所也御紋服のいまさと
わりくあとあるへし
何もあるましき
あまたは御あそひ物なと
の外それいつまても〳〵るへきなさ
なすれもの也
あつらへ御とりかへて

催馬楽　石川
石川のこまとに帯をとられて
からきくゐするいかなる帯そ
花田の帯の中はたえたれ
帯と扇しかへたる其人と
閨とのさとんたる
あやしくも　両扇のますと
云てあへかうて帯と扇と
うらひつてらちと書しれく
ゆり

（日本）高麗をと云ね人はいはあやまり
ねつさと云ひて詰まつへかるとて
そのたるそ
いらかそれ　赤色腰帯
（中）扇をとられたる人はやさて
云ひてうちかけくもとのなき
あるれたると　唐衣はいさをむし
よるとみなりとみえ人の方よ
よるとかみ三わよくみしれと
あはれさる　いさの

この法なれハ櫻に縁ある也
留むる月ハ有明の月に霞
乃名ロ花あるもしるへし
行はんと　御國にかへる也
え云の心あるへし
されハ浄土のをしへと云れをと
朧月夜の見られえ云ふの心
わかぬ也　○尊き也
心いるへし
比ハやよひの廿日あまりなれと

やうく有縁の月となる也
涼くてのさハ霞たるまえ
ましと也　南にかゝ（云）人ていきる
ゆくてこそあれと浄土の方の
中のみちをかよひて月なき
うしとみゆるまとよへきれに
あるとも　上他延かると
朧月ハ天性ニよるこそ也
さとうきなり
細取りてゆよしとそ也

いとめでたき物なり
此時の為に遣しゝ物なり　これ
は是もちりあらさずと物
打ひらきてらんとこゝろ
もみつとひろるや
こまつと物なり　それとも
めるに幸ゑ多かれとも女の為
ころくき末やとんあさく
打まかりし也

結納あるや結納御好
夫のえんの末とあとれえん
なするうしみさうらう

墨付四十七枚